

事業経営の基盤は 最高道徳である

足立政男

はじめに

1. 慈悲慈愛をもって事業経営にあたるべきこと
2. 至誠をもって正路の経営に徹すべきこと
3. 人心救済を図って事業の社会的責任を遂行すべきこと

- (1) 自利利他の経営実践者たるべきこと
- (2) 事業経営の社会的責任遂行の実践者たるべきこと
4. 積善の経営者たるべきこと

おわりに

はじめに

広池千九郎博士は、その独創されたモラロジー経済学を、「もとの第一は慈悲、至誠、人心救済、もとの第二はモラロジー経済学の原理による」と定義づけられていられるが、これは博士のまことに深遠なる哲理にもとづく経済思想であり、経済哲学であり、はたまた人生哲学であり、渡世哲学でもあったと私は考えている。

すなわち、道徳＝人としてふみ行わねばならぬ理法と、およびこれを実施にあらわす行為と経済、とくに企業や事業や家業経営の実践と道徳とは一体でなければならぬとする道経一体説を哲学的かつ科学的に体系づけられたものであり、換言すれば「事業経営の基盤は最高道徳である」と説いているのである。

さらに、これを判かり易くいえば、儒教の説く人の常に守るべき道、すなわち「白虎通」の仁・義・礼・知・信の五常と、「孟子」の君子の義・父子の親・夫婦の別・長幼の序・朋友の信、いわゆる五倫を守って企業や事業や家業の経営を行うべきであるとする主張である。

ところで、現代の社会状況は非常な混迷を続け、とらえようのない姿になっている。それとともに人々は人生の指針に迷い、確固たる価値観を見失っているのが実情であろう。しかも、二十世紀もあますところ僅かである。すばらしい二十一世紀に生き得る世代がどんどん成長しつつある現代である。

この時にあたり私は、広池博士の創始された「道経一体論」をとりあげ、家業、事業、企業は如何なる理念、哲学で経営して行くべきかという基盤と経営の在り方を歴史的な資料を通し、実証主義的歴史観にもとづいて、「道経一体論」にいう事業経営の基盤は最高道徳であるということをも明らかにしたい。

幸い京都にはひとつの商売を守って何百年、先祖代々からの事業を百年以上も継承し、今もなお隆々と栄えている企業、家業、商店、そんな老舗が千社ほどある。そして、こうした老舗が百年以上何百年もの風雪を生き抜き得た経営の中には、やはり一本の筋金に通っているのである。すなわち老舗経営の原点とも称すべきものであり、老舗経営の支柱となっているものである。それは何であったかといえば家訓であり、店則であったといえる。

ところで、その家訓は、家の憲法ともいうべきもので、家名や家業存立の基本的条件を定めた根本法であり、暮しと経営の大原則を定めた基礎的一族一門のおきてである。

創業以来幾十年幾百年と、祖先の遺業を承けつぎ、現在を生き貫き、更にこれを将来の子孫に伝承して行かねばならない経営者にとって、この家訓や

店則は彼等にとっては欠くことの出来ない渡世哲学であり、同時に経営理念、経営哲学でもあったのである。

もし現在の企業経営者が英知にみちた経営者であり、遠慮にみちた経営者、未来の読みにすばらしくすぐれた経営者であるならば、やはりこの家訓に定められた暮しと経営の原点に立って、目先の利欲に迷ったり、誤った渡世や経営は決してしないであろう。

ところで、波瀾万丈、実に盛衰極まりない実業界のことである。突如として襲来する天災地変もあれば、景気の変動・恐慌・収奪等々思わぬきびしい荒波や風雪に見舞われることは世の常である。これを乗り越え、堪え忍んで、家名や企業の灯火を消さないように守り、かつ発展せしめて行くためには、家訓の原点に立ちながらも、時勢の変動に即応し、対応して行かねばならないことは言うまでもないことである。これがなければ企業の没落は火を見るより明らかである。

「商いは戦場」である。しかも「命懸けの戦い」であり、「負けることを許されない戦い」でもある。勝つか負けるかではない。勝つしか生きのび、立ち残る道がない。まことに背水の陣の戦いである。八風吹くとも動ぜざる渡世や経営の大信念の原点を家訓や店則に求めながらも、常に先見の明と、うつぼつたる闘志をもって臨機応変、機敏なること脱兎の如く、磐石の構えで歩武堂々、商いの戦場に臨むことが大切である。

幾世紀にもわたって永続し、発展して来た老舗は前述の如き、商いの原点としての家訓があり、商いの原点が確立しており、同時に時局に即応し、臨戦体制を常にとって、正々堂々の商いをなし得るところの暮しと経営のキメ細かい規則が間髪を入れず作られ、実施されているのである。換言すれば老舗の商法というものは、守勢型の商法であると同時に即応型の商法、さらには攻撃型の商法であって、いつでも時の流れに順応し、機敏に攻勢に転じ得る力と準備が常にととのえられていたのである。それ故老舗は激しい風雪にも堪え、競争にも打勝って、永続と繁栄を勝ち取っているのである。

私は以上の観点に立ち、幾世紀にもわたる時の経過、時代の変遷の中で、

はげしい経済界の風雪を生き抜いて来た重みと、激浪に耐えて来た強靱さに裏打ちされた老舗経営の基盤を家訓に求め、これを実証主義的歴史観に基いて解明し、さらに今日のわれわれがもち、かつ悩んでいる問題意識をそれに投げかけることによって、今（現在）を如何に生き、未来を如何に生き抜いて行くべきかという指標と、企業経営の実践的在り方を、老舗の家訓と広池博士の創始された「道経一体論」と照合、対比しつつ本論文によって明確にしたいと考えている次第である。

1. 慈悲慈愛でもって事業経営にあたるべきこと

広池博士はその著「経営法大要」で、

「事業経営（者）の眼目はまず最高の品性を造る道德の体现者でなければならない。次に神の慈悲心をもって、使用人、仕入先及び得意先の三方面の人々の前途を思いやる。すなわち、これを最高道德的に開発し、もしくは救済する心でもってこれに努力するにあり」と述べていられる。

すなわち、企業経営者は最高の品性を備えた有徳者でなければならないこと。次に慈悲心でもって、使用人、仕入先、及び得意先の人々の前途を思いやる経営者であることが大切であると説いているが、まことにその通りである。京都における老舗の家訓にも、経営者の在り方を規定して次の如く述べている。

矢谷家家訓の第一條に、

「家の主人たるもの、同家人の見習う処なれば、先ず其身を正しく慎みて、家内を善に導くべし、親子兄弟夫婦の間睦く、家人並に出入のものを憐み恵みて、かりそめにも怒り、罵罵することなかれ」

とあり、一家の主人たるものは、店の統率者であるから、まず店中の者の模範となるように、日常の暮らしの中で常に身を修め、身を正しく慎んで店中の者を善導することが肝要であり、また親子・兄弟・夫婦は仲睦く暮らし、よく一家一門を^{ととの}齊え、慈悲と慈愛の心をもって、出入の者を憐み恵んで、かりそめにも怒ったり罵罵することがあってはならないとしている。

向井家の家訓「家内諭示記」には、

「主人憐みある時は下人も又信実のつとめをなすものなり、あやまちも不慮の仕損じはゆるすべきなり、然れども心得悪しき事のある時は柔和に意見説諭を致すべし、下人は道理に暗きものなれば穏やかに理解すべきなり」とあり、何れも経営者たるべき主人の在り方を教訓し、経営者はつねに温厚で、皆に慕われる経営者であれと強く要求しているのである。

西村彦兵衛の「亭主の心得」には、

「夫、家を起すも崩すも皆子孫の心得ばかりなり、亭主たる者、その家の名跡、財宝自身の物と思ふべからず、先祖より支配役を予りおるものと存じ、名跡をけがさぬように子孫へ教え、先格を能く守り勤め、以て仁義、人を召使い、沓軒にても別家の出来るを先祖への孝と思ひ、時来たり代を譲り隠居いたすとも榮耀なるくらしは大いに誤なり、只世用をのがれ、質素にくらす手本に成る様にいたし閑居すべし、但子孫相統長久の工夫を励むべし」と規定している。

すなわち、家業の永続も繁栄も皆子孫の心掛け次第である。一家の主人、経営者たるべきものは、その家の名跡も、財宝も自分のものと考えてはならない。先祖から受け継ぎ、将来の子孫に遺さねばならないものであって、自分は一世代だけその支配役を預かっているリレーランナー（中間走者）に過ぎないものであることを弁えて、一家の名跡を汚がさないように子孫に教えると同時に、経営者たる己れ自身は、先祖以来の家格や身の分限を克く守り勤め、慈悲慈愛と正義でもって誤ることのないように家人を召使わなければならない。そして一軒でも家人が立派に志を遂げ、別家して「のれん」をかかげることが出来ることは、先祖に対する孝行であると思慮すべきであると教訓している。

矢代仁兵衛家の家訓「定メ」には、

「何卒人ハ道ヲ正シク勤メ渡世致シ度ク候、最モ主人ハ小者ニ至ル迄モ我が子ノ如ク思ヒ、願フ処ハ人々相統致サセ申サデハ主人ノ役目相勤マリ申サズ候」

と、主人の在り方を規定している。すなわち、人は一生涯、人として守るべき道徳を正しく守り勤めて、渡世したいものである。それ故主人たるものは丁稚小僧に至るまで、すべての従業員を我が子のように考えて召使い、一人残らず、立派に成人して一家の立派な相続者になるよう仕立て上げなければ、主人としての役目は相勤らないことになると、主人としての在り方をきびしく規定している。

以上の老舗の家訓で明らかなように、経営者たるものの在り方は、広池博士の創始され、唱導されたモラロジー経済の「もとの第一は慈悲、至誠、人心救済」とすべての点において合致するのである。又、前述したように、広池博士の「事業経営の眼目はまず最高の品性を造る道徳の体現者でなければならぬ。次に神の慈悲心をもって、使用人、仕入先、及び得意先の三方面の人々の前途を思いやる。すなわちこれを最高道徳的に開発しもしくは救済する心をもってこれに努力するにあり」と述べられている言葉とも全く一致しているのである。

2. 至誠でもって正路の経営に徹すべきこと

広池博士は経済について次の如く定義していられる。

「経済トハ仁義ヲ以テ国ヲ治ムル事也。大学ニ『国ハ利ヲ以テ利ト為サズ、義ヲ以テ利ト為ス』。是句富国ノ要領也。古今ノ賢君皆利ヲ棄ツレドモ嘗テ富マザル者ナキハ歴史ヲ読ンデ察スベシ」

すなわち、致富の道は正義の商い即ち、正路の商いを優先せしめ、不正な利益の追求を商いの本義としていないのである。

それはさらに、次の博士の言葉によって明らかにされる。

「如何ニ最高道徳ヲ行ヒ、人心救済ニ努力シ、若シクハ財力ニ貢献シテモ、其ノ行為ノ中、若シクハ事業経営ノ方法ノ中ニオイテ、自然ノ法則ニ違反スルコトガアリマシタナラバ、ソノ違反シタ分量ダケ、ソノ罰ヲ受ケネバナリマセン」

と、すなわち、経営の原点は天地自然の法則即ち至誠に依拠すべきであって、

若しこれに違反した時は、それ相応の天罰を受けることになることと教訓されているのであるが、まことにその通りである。

やゝもすると、「商人と屏風は直^{ちよく}にては立たず」とか「ウソも元手のうち」、「商人のウソは神もお許し」と言った昔からの俚言に惑わされ、不正な手段で不義な財宝・利益を貪り、富貴になることをあたりまえのように考え、これを正当化しようとするものもあるが、これは大なる誤りである。そのような手黒の手段や商売では、一時的には繁昌し得ても、それは真の繁昌ではなく、たとえ富貴になり得たとしても決して永続出来るものではないのである。

向井家の家訓「家内諭示記」に、

「金銭ヲ貪ル人ハ子孫ニ愚カナル者出生シテ、先祖ノ遺業ヲ亡ス、金銭ハ一銭タリトモ不義ノ財ヲ取ルベカラズ」

「正直ニシテ家業ニ精ヲ出シ、金銀ヲ溜メテハ貧シキ人ヲ助力シ、其ノ家ニ從フ因縁有ル者ヲ取立テ、又ハ高貴ノ人モ金銭ニ乏シキ方ハ、其筋ニ依テ用達シ参ラスレバ、誠ニ一生ノ規模是レニ過グベカラズ、然ルヲ、吾ガ為、又ハ子孫ノ為トノミ心得、他人ハイカナル難儀苦シミ有テモ見向キモヤラズ、強欲無道ニシテ、人ノ為トイウ事ヲ知ラザレバ、オノズカラ恨ミ、ソネミヲ受ケテ、カナラズ子孫相続セヌモノナリ」

とあるが、これらの教訓は何れも、天理に背いた強欲無道の行為は必ず天罰を受け、子孫は永続せず滅亡するものであると教訓し、いわゆる広池博士の「如何ニ最高道徳ヲ行」っても「其行為ノ中、若シクハ事業経営ノ方法ニオイテ、自然ノ法則ニ違反スル事ガアリマシタナラバ、ソノ違反シタ分量ダケ、ソノ罰ヲ受ケネバナリマセン」と述べられた教訓と全く同じことが、老舗の家訓では規定されていて、天理に背かぬ経営と暮らしをするように心掛く可しと子孫を戒めているのである。

外村与左衛門家の「心得書」においても、

「古来ヨリ我が家相伝^{カケヒキ}ノ欠引ハ、自然天性ニシテ、我勝手計リヲ計ヒ候事一切相成ズ」

「当家先祖ヨリ伝来ノ欠引ハ、売買共天性成行ニ随ヒ……目先当前ノ名聞

ニ迷ハズ遠キ行末ヲ平均ニ見越シ、永世ノ義ヲ貫キ申ス可キ計ヒ也」

と規定し、老舗の商法、家業経営が常に天理に順応し、自然の法則に違反してはならない、永世の義を貫かねばならないと、厳しく規定しているのである。

「心だに誠の道にかなひなば

祈らずとても神やまもらん」(向井家「家内諭示記」)

家を継承し、家業の永久相続を図るためには、誠の道でもって家業や事業を経営することが絶対に必要である。

金銀財宝はあくまでも生活の手段になるけれども決して貴いものでもなければ、永続して持つことは困難である。貴いものは心の誠であり、天理を守って己の職分に精進することである。勤儉貨殖の道も食欲になって道義に反した場合は、家を滅ぼし、子孫を滅ぼす結果を招くものである。

西村彦兵衛家の「家訓」には、

「家相応の分限を知って正直正路にして質素に暮すべし」

と規定し、知足分限を弁えて正直正路の暮らし方をすべしと教訓している。

向井家家訓「天理定法家内話」には、

「人ノ行ノ最モ第一ハ神仏へ信心正直ナリ」

高島屋百貨店の店規でも、四綱領のうち二綱領までが、この正直正路の商法を規定している。

第二義、正札掛値なし

第三義、商品の良否は明らかに之を顧客に告げ、一点の虚偽あるべからずすなわち、商いの道は不義を排し、正直正路、至誠にありとして、一点の虚偽をも許さないといいた商法を柱にして経営している。

かかる正直正路の商法や至誠に徹した経営と暮らしは、必然的に無理に利益を貪ることを厳しく排斥するに至るのである。

矢谷家の「家訓」には、

「無理に利を貪れば、却って財を失ひ禍ひ来るの本也」

とあり、無理な利益をとってはならない。無理に利益をとれば、結局は財を

失い、わざわざがやって来る本になると戒めている。

佐竹家の「家業一枚起請文」には、

「但、三割、四割の高利取候は皆不実也、少しの利なりとぞ思う内に、口過ぎも身過ぎも致す也」

と、三割、四割の暴利をとるような悪徳商法はしてはならない。少しの利なりと思う内に渡世が出来るものであると訓戒している。まことに味うべき言葉である。

西川甚五郎家「定之事」には、

「仮令舟間之節ニ到ルトモ余分ニ口銭申請敷事」

すなわち、琵琶湖や北陸の海が荒れて、船荷が到着せず、木綿や麻布や蚊帳が品切れになった場合でも、余分の口銭を取ってはならないと規定しているのである。

かつて昭和48年末の石油値上げを契機とする狂乱物価に便乗し、千載一遇の好機とばかり、一部の悪徳商人が買占めに狂奔し、便乗値上げに走って暴利を貪り、世論のきびしい非難を受けた例があるが、かかる商法は老舗における正直正路の商法とは全く対照的な不実不義の商いであって、幾百年も永続している老舗の商法とはおよそ無縁のものであるとあってよい。

売り惜みをして利益をいかに多くあげても、その商いはすでに述べた如く「自然自利利他の弁利を知らざる道理故」「決して永続長久の見通しこれ無し」として、老舗では剛欲に迷わされた暴利を貪る悪徳商法や、手黒の商いを厳しく排斥している。

外村市郎兵衛家の「厳改正箇条」には、

「店規則之趣一統堅ク申合セ高利ヲ貪リ、不正之者ハ商売相成ズ候事」

と規定し、高利を貪る商いを厳禁している。

そのために、老舗では高利を貪らない商法と「利は元にあり」という商法を両立するために、仕入れに細心の努力を払っている事はいうまでもないところである。

木村卯兵衛家の「先祖申伝在之家法定」には、

「主人買物成ル丈致シ、精々利口＝買入レ、先方へモ成丈薄口銭＝売り渡シ高利ハ一切無用」

と規定し、良質安価な品物の暴利を排し、適正利潤で商うためには、経営責任者たる主人が自から仕入れに向いて、その豊富な経験と先見の明を基にして、品質・価格・売先等をしっかりと判断し、出来る限り利口に仕入れ、先方へも出来るだけ薄口銭で売り渡し、高利は一切無用であると宣言している。

「利は元にあり」という言葉を生かすか殺すかは、仕入れが良いか悪いかにかかっているとって差支えない。それ故仕入れの時は主人が仕入れに向いたのであるが、仕入れの時期や仕入れ方についても老舗では最大の注意を払って、より良い品をより安く仕入れるよう努力しているのである。

外村与左衛門家「心得書」には、

「買物は総じて諸人之望取り申さざる時節を相考へ、自然下値之品を能々細吟味いたし、売場必ず入用之品計相撰び、買入れ置き、自然得意望み取り候節之用意致す可き事」

と規定している。

要するに老舗の商法では暴利を排し、至誠の経営で、正路の商いをするために懸命の努力を払い、顧客の信用を永遠に得る可く勉めているのである。

3. 人心救済を図って事業の社会的責任を遂行すべきこと

広池博士は「経営法大要」において、

「最高道徳とは自分と相手方と第三者と全部皆共に相当の利益を受くる人間の行為を指す」

と述べ、事業経営上における最高道徳を定義し、自分と相手と第三者と全部の者が皆共通して、それ相当の利益を受け得られるような人間の行為であるとしている。逆にいえば、これに反する行為は、最高道徳にはずれたところの排斥すべき行為であるとしているのである。

又道徳科学の論文でも、「事業へ悉、誠、救済、為念。」

すなわち、「最高道徳に於ては、自分の家業若しくは職務は神の力を助けて人類全体の便利と利益とを増して之を満足させる事を主となし、而して自分の精神はすべて日常自分の接触する人々の精神を最高道徳的に開発しようと心掛くるのであります。かくて自分の家業若しくは職務を以て、自己を益すると云ふ事よりは、寧ろ自分の家業や職務は、人心を開発、若しくは救済する一つの公設機関であるというように考へて、其職務を行ひ、若しくは其家業を勉勵したならば、其徳の増加と共に社会の信用大いに加わりて、必ず幸福の身となり得るのであります」

と述べていられるが、博士の創始された最高道徳とは最終的には人心救済を目的とするところの経営哲学であって、今日のいわゆる事業経営における社会的責任論を明確に打ち出しているのである。

(1) 自利利他の経営実践者たるべきこと

広池博士は「経営法大要」において、

「人間の利己的本能より出ずる同情、親切、義侠心は、或は自己若しくは其の団体を破壊して自他共に滅ぶる原因を造り、或は味方を得ると同時に敵を造る故に、之は破壊的なり。」

と述べて、如何に善い行為に見えても、それが利己的本能に基づいて行われている場合は、「自他共に滅ぶる」「味方を得ると同時に敵を造る」原因となる故に「之は破壊的」行為であると教訓されている。すなわち、経営方法としては自利利他の経営でなければならないことを明確に打出し、「道経一休論」による実践がここで窺えるのである。

心学の創始者石田梅岩も「真の商人は先も立ち、我も立つこと思うなり。」そしてこのようにしてこそ、商人は「福を得て万人の心を安ずる」ことが出来るのである。それ故「売渡す代物を大事にかけ、少しも鹿相せず売渡さば」買う人も「心即ち安からん」、商取引は「自他共に万事に通用して心やすめる為の売買にあらずや」このようにして「我は福を得、天下の人は心安められる」ならば、はじめて商人は「天下のおんたからと称せられるべく」「自

他を安楽にするは天下太平を毎々に祈るといふ者」であり、これが商人道の本であるとして教えているが、これ全く、広池博士の説く所と同じであって、両者の説くところを照合、対比して見れば明らかである。

この「自利利他の経営」こそ、京都において幾世紀にもわたって永続し、繁昌して来た老舗における経営の原点であった。

外村与左衛門家の心得書には

「売方は総べて諸人望み取り候節、有る物決して売り惜みなく買人の気配に順じ、時節之相場たとい不引合なりとも其の時の成り行き相場次第に相働き、必ず損得に迷わず諸人の望み取候節、其^ず図をはずさず順々に売払い申す可く候」

と規定し、商いの道は、まず第一に多くの買手が希望する時を商機と考え、決して売り惜しみをしないで売ること。しかも売り値はその時の相場次第で売り、損得に迷わず、顧客の要望に応じ、これを順々に売り払うこと。

「売惜み、品もの不弁利にいたし候事、天理に背き且家風に背き甚以心得違也、たとい強気見込之取計にて利益多勝に有之候とも、自然自利利他之弁利を知らざる道理故に、決して永続長久之見通し無之、依之取計目先当然之見込見越之取計は、家法として古来より堅く申合之通り急度相心得可申候事」

すなわち、世間の人が入手したいと希望する時に「売り惜み品物不弁利に致し候事」は「天理に背き」「家風に背き」甚だもって心得違いの商いである。たとえ、売り惜しみをして、利益を如何に多くあげ得ても、この商いは「自然自利利他之弁利を知らざる道理故」に、そのような商いは「決して永続長久之見通しこれ無し」として、売り惜しみを、品物の流通を阻害する行為を天理に背き、家風に背く商行為であるとして厳しく排斥している。

「高値にて売付け、其の後下落いたし、都合よく売破い候とて利勝を喜ぶ事、尋常人並にして大きに我身勝手之心得也、得意先々にて自然損失これ有る可き事厭わざる心得不実なり、行末思ひ計るべし」

と規定し、得意先へ高値で売り付け、其の後で値段が下落して、都合よく売り逃げが出来て利益があったと喜ぶことは、尋常人並の人間のする事であっ

て、大なる我身勝手のけしからぬ心得違いである。お得意方はこのために、さきざき自然高値買いをしたため損失を受ける結果になる。これを承知で商売して少しもいとわないのは、皆不実不義の商いで道に反した商行為である。このような者は行く末が思いやられる危い商人である。そして、

「兎角当然之利益を好み、末に至り、我も人も不足なる事を弁えざるは、小人之愚なる取計ひにして、取るに足らざる小^こ逆^{さか}敷事也、急度相心得可きなり」

と規定している。

すなわち、目先きの利益に眼がくらんで、自他の不弁利を弁えない商いは全くもって「小人之愚なる取計ひ」であって、まことに取るに足らない、悪る賢い行為であるときびしく戒めている。

「売り物は高値にならざる前より人の望にまかせ、順に売惜みなく売払い申す可き事、売って後に悔むようならば、サキザキに利益有る也、是を重畳と相心得、売って悔む事、商人之極意と申事、能^{よくよく}々納得いたし、我も人も無事長久なる事を思惟して専ら勤行致すべし」として、売物は高値にならない前から、世間の人々が欲しいと望んでいる時に売り惜みなく売り払い、売った後で「モット高く売れたのに早やく売りすぎた。しまったわい、ミスミス損な売り方をした」と、「売って後に悔む」ような商い方をする商人を、商人の商人たる極意であるとよくよく納得して、「我も人も無事長久なる事」を考へて専心商業に励めと訓戒している。

「売って悔む事、商業之極意肝要に相心得申す可く候」

と宣言し、売り惜しみをしない商い方、暴利や利欲に惑わされない商法を堅持すべしと規定しているのである。

さらに、「欲深きものは皆身上持たざる」ものであるとして次の如く規定している。

「古来より我が家相伝の欠^{かけひき}引は自然天性にして、我勝手計りを計ひ候事一切相成らず、自他共に弁理にて相成り候事を深く相考へ、勤め行ひ致す可き也……是れ則ち先祖代々の思召、退転無く今日に相続致す所也」

「当家先祖より伝来の欠引は売買共、天性成行に随ひサキザキの気分に順じ、相手少なき時に買入れ致し候へば売人も悦び申す可し、又サキザキ望取候節に売惜みなく売払候得ば得意も弁利を悦び申すべし、是れ則ち家伝極意の心得肝要なるべき事」

と規定し、「我が家相伝之欠引」は「自然天性」にして「我勝手計りを計ひ候」ことは一切相成らずとし、これがすなわち先祖代々の思召であり、何の故障もなく今日に至るまで長く相続出来たゆえんである。それ故、商品を仕入れる時には、買手の少ない時に買入れるようにすれば、売手も売れない時に買ってくれるから喜ぶであろう。又、商品を売惜しみなくどんどん売って差しあげれば、得意も弁利を喜ぶであろう。このように、売手も悦び、買手も悦ぶ商法こそ、我が家相伝の商法であっても最も大切な商売上の要である。

要するに「自利利他の商い」こそ、商いの本義であり、家業永続のためには、欠くことの出来ない先祖伝来の秘訣になっていたといつてよい。

天保二年正月に制定された高島屋の店規四綱領の第一義にも、

「確實なる品を廉価にて販売し、自他の利益を図るべし」

と規定し、より良い品をより安く販売することにより、自他両者の利益を図る事をモットーとすることを商法の原点の一つにしている。

京染問屋の吉竹良夫家、店則十則には、

「わが店は繁昌よりも只客の、便利を先に計る店なり」

と規定し、自利よりもむしろ他利を優先せしめているのである。

商人の商人たるゆえんも、商いの商いたる本義も、実にここにあるのである。

自分一個の利益を得ようとするのではなく、常に相手の利益を考え、売り惜しみ、買占めを排斥し、「自他を安楽にするのは天下太平を祈るというもの」といった石田梅岩の言葉ならびに、広池博士の教訓された次の言葉が、そのまま実践されていたといつてよい。

「各々其立場を固め、永久の安心と幸福とを得るように其の心がけを改むること。而して最高道徳にては、此等の利益の相反するものに思われて居つ

た所の双方の利益を増進せしめ、以て各個人の安心・幸福を完うさせ、且つ、すべての団体の統制を完うさせようとするものである。これが即ち其の道徳である」(経営法大意)

すなわち、自利他利の経営実践者であつてこそ、自他双方の利益を増進せしめ、かつ、それぞれの永遠にわたる安心と幸福を完うさせ得るのである。そしてかかる経営者であつて、はじめて最高道徳の実践者、最高道徳の体現者であるといひ得るのである。

(2) 事業経営の社会的責任遂行の実践者たるべきこと

最初にも述べた如く「最高道徳とは自分と相手方と第三者と全部共に相当の利益を受くる行為を指す」と、広池博士は「経営法大意」で自分の創始した最高道徳を定義づけられ、更に、モラロジー経済学の定義においても、「もとの第一は慈悲、至誠、人心救済」であると宣言し、人間の経済行為は自分と相手方と第三者を含めた全部のものの利益を満足せしめるものでなければモラロジー経済学の人心救済は達成出来ないとしていられる。そしてその目的を達成するためには「各々其立場を固め、永久の安心と幸福とを得るように其の心がけを改むること。」とともに、その「何れに対しても同一の原理をもって其の精神を開発」すること。又「同時に双方の利益を増進せしめ、以て各個人の安心・幸福を完^{まこと}させること。」更に「すべての団体の統制を完うさせようとするものであること。」以上のものが全部揃わなければならない。そしてそのような行為が最高道徳の行為というものである。換言すればモラロジー経済学では、自他の利益は勿論、第三者を含めた全部のものの永久の安心と幸福を希うものであり、いわゆる人間としての社会的責任遂行の実践哲学であると同時に、人心救済を目標とする経営経済学でもある。平易にいうならば、モラロジー経済学の原理は社会的責任の遂行による事業経営でもって、すべての人々の人心救済(すべての人々に永久の安心と幸福を与えること)を図ることであると解すべきであると考えられる。

ここにモラロジー経済学が事業経営にあたっては自利利他の経営、すなわ

ち、石田梅岩のいう「真^{まこと}の商人は先も立ち、我も立つことを思うなり」という買手、売手の利益を図るといふ二者双方の枠組を越えて、今日盛んに叫ばれている家業、事業、企業における社会的責任の遂行を厳しく指摘し、経営者における人心救済の責務を経営の原点に据えているのである。これ全く広池博士の驚異的先見の明に基く学説以外の何ものでもない。

かつての石油危機を「千載一遇の好機」とみて便乗値上げに狂奔した石油会社が「悪徳商法の見本」なら、公害もみ消し工作の限りを尽した某亜鉛鋳業所はさしあたり「悪徳公害企業のサンプル」的存在というべきであろう。

今日では、海の汚染は拡大し、工場排液で死の海と化しつつあり、漁民は汚染源の工場を告発し、海上封鎖で抗議する。空港や原子力発電所を設置するといえ、騒音だ、危険だと地域住民がさわぎ立て、反対運動で右往左往する。高度成長期では花形役者として、敗戦による廃虚と混乱の中から日本経済の復興に寄与した企業が、まるで悪の仕掛け人の元凶のように、周囲の住民から見られようになって、物の価値観は多様化し、混乱している。

今や事業も企業も地域住民とのコミュニティーを考へて経営を行わなければならない時代になった。

勿論従前において企業は社会に奉仕すべく、商品なり、サービスなりを提供したが、これからは、もっともっと社会的責任の遂行に努力し、社会のため、地域住民のために貢献して、自利・利他は勿論のこと、世のため、人のためになる経営を行わねばならない。社会なくして企業の存在はなく、社会的責任の遂行を企業存立の原点におかねばならないということに経営者は目覚めねばならないのが現今の時勢である。

此の点、京都における老舗の経営は地域住民とのコミュニティーを大切にしていたことは、すでに自利利他の商法でも述べたところであるが、商人はどんなことがあっても、他に迷惑をかけてはいけない、世間の害になるような商いをしてはならない、ということが老舗商法の鉄則になっていたのである。

西川甚五郎家の「規定之事」にも、

「売品相撰^{えらび}ひ、売鬻^{うりまひ}致す可く候、仮令船間拵^{たもと}底之節にても格外之売利申受け間敷、且つ世間之害に相成候事決して致す間敷き事」

すなわち、蚊帳を始めとする商品が、暴風雨等で船の輸送が止まったため、品不足になった場合でも、適正な利益以上の法外な暴利をとってはならない。又世間の害になるような、買占め、便乗値上げ等の悪徳商法、手黒の商いをしてはならないと、きびしく規定している。

老舗の商法は品不足につけ込み、値上げに便乗したかつての石油商人や悪徳商人が「千載一遇の好機」として暴利を貪ったのとは全く対照的で、実に正々堂々とした商法であり、経営であったと云って差支えない。

向井家「家内諭示記」には、

「奢^{ツイ}ヲ省^{イト}キ儉約ヲ守リ、物ノ費^{ツイ}ヲ厭^{イト}ヒ、我日々ニ成スコト、費^{ツイ}ニ成ラヌヤウ考ヘテ成スベキナリ、又世ノ中ノ弊ニ成ラヌヤウ致スベキニアリ」

と規定し、家業経営においては、奢侈を省いて節約をはかり、物の浪費を防いで堪忍の生活をし、決して世間に迷惑をかけたり、弊害をもたらすようなことはしてならないと戒めているのである。

西村彦兵衛家の「家訓」では、

「いつわりをなし、又は無理をいひ、惣じて人の害になるべき事をすべからざる事」

とあり、ウソ偽りを言ったり、無理な事をして、世の人の害になるようなことをしてはならないと戒めている。

さらに、商人の真の在り方が、単に世間の人に害を与えるような行為をしてはならないといった消極的な行為にとどまらず、積極的に社会のため、人のためにその職分を通じて貢献すべきであるとする家訓としては次の如きものがある。

向井家の家訓「家内諭示記」には、

「正直ニシテ家業ニ精ヲ出シ、金銀ヲ溜メテハ貧シキ人ヲ助力シ、其家ニ従フ因縁有ル者ヲ取立テ、又ハ高貴ノ人モ金錢ニ乏シキ方ハ、其筋ニ依テ用達シ参ラスレバ、誠ニ一生ノ規模是レニ過グベカラズ、然ルヲ、吾ガ為、又

ハ子孫ノ為トノミ心得、他人ハイカナル難儀苦シミ有テモ見向キモヤラズ、強欲無道ニシテ、人ノ為トイフ事ヲ知ラザレバ、オノズカラ恨ミソネミヲ受ケテカナラズ子孫相續セヌモノナリ」

と教訓し、正直と勤勉で大いに稼ぎ、金銀を貯えて富者になり、貧しい人を助けたり、自分の家に因縁のある人を援助したり、高貴の方にも金銀の乏しい方には融通してあげるならば、これに越した一生の送り方はないとして、人のために尽すべしと教えているのである。

「人ノ為トイフ事ヲ知ラザレバ」必ず子孫は長久せずとまで断言して、更に次の如く教訓している。

「凶暴ナル者ハ必ズ亡ブ、仁慈ナル者ハ^{イノチナガシ}「寿」シ」

「長命ハ宵寝朝起キ信心ト、食ノ心得、食ヲヒカエテ食ニ飽ク、身ノ幸ヒヲ悦ビテ、飢ニ苦シム人ヲアハレメ」

これ等は、広池博士の創始されたモラロジー経済学の「もとの第一は慈悲、至誠、人心救済」であると述べられていることと全く同じであり、「道德と経済・経営とは不離一体である」こと、すなわち「事業経営の基盤は最高道德である」ことを家訓にしたものである。

広池博士が説く如く、経営が慈悲、至誠、人心救済の経済生活と経営形態であるならば、又「事業ハ悉ク誠ヲ^{ツク}悉シ、救済ヲ念ト為ス」という目的に沿っているならば、老舗の家訓に規定せる如く「仁慈ナル者ハ^{イノチナガシ}「寿」シ」すなわち、永続と繁栄は期せらるべく、又自他共に永久に安心と幸福を享受する事が可能になり、幸せな生涯は勿論、子孫末代に至るまでの幸福が得られるのである。

大丸百貨店の業祖正啓はかかる事業の社会的責任について次の如く述べている。

「百姓は耕作して人に食を与え、職人は器物を作って御用を果たす、商人は諸国の物を売買し、流通を因って人の用に応じ、その中で自然に利を得て自分を養うて行く、必ず自分だけの事を考えずに広く天下の御用を勤めるといふ考えでなければならぬ」

すなわち、商人は商業を通じて「天下の御用を勤める」のが、商人の本領であると述べ、商人の社会的責任の所在を明確にしている。

広池博士は「最高道德にては……以て各個人の安心・幸福を完うさせ、且つ、すべての団体の統制を完うさせようとするものである」（経営法大意）と述べて、やはり事業経営における最高道德の実践形態はすべてのものの安心と幸福を達成することにあると宣言して、事業経営の社会的責任を明確に樹立していられる。

4. 積善の経営者たるべきこと

広池博士は最高道德の論文において

「積善之家ニ必ズ余慶有り、徳ヲ尚ブコト学・智・金・権ヨリ大ナリ」

「孔子は『易』において、積善の家と積不善の家に別けてありまして、其結果を断言してありますが、世界の歴史的事実及び社会学的な事実は共に正しく之を証明して居って、豪も誤りはありませぬ。而して此最高道德にては、真の積善とは正に人心の開発若しくは救済の事を指すのであります。故に年を積み代を^{かま}累ねて是等の善事を行うものは遂に積善の家と為って萬世不朽の家運を造り出すべく、之に反して、人心の開発若しくは救済の原理を了解し得ず、単に因襲的道德に拘泥して利己主義にのみ^{あぐさ}齟齬するもの及び不道德のものは皆共に早晚遂に滅亡するに至るものであります……此故に識者深く此原理を味うて、現代に於ける真の積善、即ち人心開発及び救済、真の慈悲心を興して、徐ろに子孫萬世不朽の計画を建つるよう願ひ上げます」（以下略）（最高道德実行に関する考察）

次に博士は「徳ヲ^{カマ}尚ブコト学・智・金・権ヨリ大ナリ」と述べられ、次の如く説明されていられる。

「現代の文明人は既述の如く、学力・智力・金力・権力及び腕力を尚ぶのであります。故に此の有形的若しくは物質的な力の獲得に対して、激烈なる競争が起って来て政治上経済上は勿論あらゆる方面において、陰に陽に極めて悲惨なる競争が行われて居るのであります。今、モラロジーは道德をも

って斯かる物質的な人間の力より優秀なるものであることを合理的に確め得たのであります。それ故に道徳の実行をもって、あらゆる人間の力を獲得する以上に権威あるものと認むるのであります」（最高道徳の実行上の注意条件）

これ等の言葉は何れも最高道徳の説くところの真髓であると思われる。

老舗である永楽屋の「教訓大黒舞の『数へ歌家訓』」の最後の締めくくりとして、

「十に、徳に入るならば

これこそまことの大黒」

人はともすれば欲心に目がくらみ、金銀や権力に迷わされて不実不義、不正奸曲を働き、食欲になって家を滅ぼし、子孫を滅ぼすに至ることは歴史的にも、社会的事実を見ても明瞭である。事業経営者がもし、道徳に目覚め、善根を積んで道徳的な、積善の生活をするならば、その人自身は勿論、その人と因縁ある人も、社会の人もすべてのものが人心開発と人心救済をうけて真の慈悲心につつまれた、永久の安心と幸福が得られ、すべての人がいわゆる大黒様である福の神になることが出来る。

「子貢曰ク、夫子温、良、恭、儉、讓、是レヲ五徳ト言フ、聖賢ノ道ハ陰徳ノ施ス物ニ施シヲナス時ハ、名ノタメニハスベカラズ、陰徳ト言フ事ニ志スベキナリ、人タル者ハ是皆万物ノ靈ト言フナリ、万物ノ靈ト生レテ、其ノ靈タルヲ知ラスユエ、人ニアラザル人多クアルナリ」（向井家、家内諭示記）

と述べ、人に仁徳を施すには陰徳を積むことに心がけることが大切である。この陰徳を積んでこそ真に万物の霊長たる人間になり得るし、聖賢の道を実践することになるのであると教訓して、

「勲功天下ニ過ギテモ人ニ讓^{コトバヒクキ}リ、高ク行ヒテモ言^{ヘリクダ}微ハ、身修マル所以ナリ、先祖ニ陰徳アルト、陰悪アルトニ因ッテモ子孫善悪ノ報ヒ同ジカラズ」と教訓し、家が無事長久するか否かは、先祖が陰徳を積んであったか、反対に陰悪をしでかしてあったかによって、その因果応報が子孫に現われて来る

ものであるとしている。

西尾八ツ橋本舗家の「家訓」には、

「徳、金^{カネ}ヲ積^{ツク}ミ子孫^{コソク}ニ遺^ユスベシ、積^{ツク}ミ書^{カキ}ヲ遺^ユス子孫^{コソク}ニ遺^ユスベシ、説^{ツク}キ不^チ知^ラズ陰徳^{イントク}、其々^{シテ}中^ニ以^テ為^ス子孫^{コソク}長久^{チカク}ノ計^ハ、此^レ聖賢^{セイヤウ}積^{ツク}ミ後^ノ人^ニ遺^ユスベシ」

とあり、子孫に金を積んで遺産として与えても子孫が必ずしもこの遺産を守って失わないとは限らないし、子孫に読んでほしい書籍を積んで残した場合でも全く同様であって、子孫が先祖の意を汲んで必ずしも読んでくれるという保証はない。さすれば、陰徳を積んで子孫に遺しておくことが、何を遺すよりも一番すぐれている。この先祖の遺した陰徳は目に見えない遺産であるが、子孫が無事長久に栄える基となるものであって、これこそが聖賢の教訓であり、後世の人が見習うべき手本であると教えている。

矢谷家の「家訓」には、

「常に心懸け陰徳を積むべし、陰徳とは善事をなして、其の善を知らん事を求めざるを陰徳といふ。貧窮を救ひ、飢寒を憐れみ、老人をいたわり、生ある物を殺さず、万に慈悲の心を心にすれば、自然に天道の冥加に叶ひて家長久なるべし」

と教訓している。すなわち陰徳とは善を施して、その善が人に知られることを求めないものであり、万事慈悲と慈愛の心をもって貧窮を救い、飢寒を憐れみ、老人を助け、病人をいたわり、生あるものを殺さないようにして陰徳を積むならば、自然天道の冥加に浴して、家は長久するものであると教えている。

そして更に、

「金銀を多く子孫に残し与へんより、財をすて、広く善事を積置くべし、其徳子孫にめぐりて、子孫のさいわいとなる」

と戒め、陰徳に心掛け、善を積むことが、金銀を子孫に残し与えるよりもよい。財をすて広く善事を行っておけば、その陰徳はいつかは子孫にめぐり、めぐって子孫を幸福にするものである。まことに、子孫を幸福にするか不幸

にするかは、祖先に陰徳・積善の行為があったか、反対に兇暴なる行為や道にはずれた行為、すなわち陰悪、積悪の行為があったかによって左右されるのである。それ故、此の世に生を享け、命のある限りは、慈悲、慈愛の心をもって、かつ真心（至誠）をもって、人心を開発し、救済し、すべてのものに安心と幸福をもたらすよう努力することが何よりも大切である。これは事業の経営にあたっても同様である。

向井家の「天理定法家内話」にも、

「陰徳ヲ積ンデ、驕ヲ除キ、冥加ヲ知り、儉約ヲ守リ、天意ニ背ク事ヲ禁メ慎ムニアリ」

「人ヲ救フハ急難ニ逼ル者ヲ救フベシ、恩ヲ施シテ報ヲ求ムル勿レ」

「一戸ノ主トシテ、天理ヲ犯シ、驕リ榮花ヲ傲ス時ハ、家福ヲ我一生ニ取越シ、末代ノ子孫ヲ亡ス、畏ルベシ、慎ムベキニアリ、上ヲ敬シ、仁愛ニ志シ、又窮スル者ヘ憐ヲ加フベキナリ、積善ノ家ニハ余慶アリト言フ」

と繰返し、若し子孫の無事長久と安心と幸福を希求するならば、陰徳を施し、積善に心掛け、驕奢をおそれつつしんで儉約を守り、人に恩愛を施してもその報いを求めず、身を修めて天意に背かずして暮すことが、何にもまして大切であると戒めているのである。

広池博士は「最高道徳実行の効果に関する論文」の中で、

「如何なる場合にも道徳に立脚するものは遂に克つべく、且つ其道徳は国家的及び世界的なるもの遂に克つ」

と宣言され、ついで「積善の家及び積不善の家」（前述の通り）について述べられ、「積善累積の効果」と「積悪累積の結果」を明らかにし、「軽微なる善悪累積の結果は如何なる径路を取りて現わるや」ということについて、次の如く述べている。（但し、要約）積悪の場合は、

第一、永い間の軽微なる犯行の累積は終に疾病となり、不健康となり、短命となり、其害子孫にまで及ぶものである。

第二に、たとい極めて軽微なる事も、これを累積すれば遂に種々の悪結果を生ず、すなわち

(1) 其精神作用は肉体を刺戟して、其の骨格及び容貌を悪化して社会の人に嫌われるに至り、出世の途絶ゆ。

(2) 其精神作用は肉体を刺戟して遂に疾病を生じ、不健康・短命・子孫断絶、若しくは其他の不幸を来たす。

(3) 其精神作用が其人の行動を悪しくするが故に、遂に其の人をして失敗、若しくは滅亡の運命に陥らしめる。

第三、かくて、たとい如何に軽微なる事も之を累積すれば種々の重大なる悪結果を生ず。即ち先ず其の犯行を為す場合には、その場合毎に其人の精神作用が其人の肉体を刺戟して漸次に其容貌を悪化させる結果、其人の運命は遂に零落若しくは滅亡に到る。すなわち、

(1) 常に何事にも他人を無視する行動者「傍若無人」

の顔は横着型、乱暴型となる。

(2) 其精神の奥に他人を無視する精神作用の盛んな場合は高慢型となる。

(3) 何事にも抜目なく利己主義的に陰険な行動者は狡猾型となり、若しくは悪人型となる。

(4) 常に何事にも他人の迷惑を察する智力なくして、無意識的に公德を害するものは、馬鹿型、無思慮型となる。

かくて、その犯行はたとい軽微にしても、社会は其人の悪行動を見聞して有形無形のうちに憎悪、軽蔑するようになり、其悪行を為す人は自ら人望を失い信用をなくして、其の運命、零落若しくは滅亡に傾くものである。それは恰も最高道徳が幸福を齎すと同じく、不道徳の結果は思わざる災害を生ずるに至るものである。

以上は広池博士の「軽微なる善悪累積の結果は如何なる径路を取りて現わるや」の要約であるが、博士は更にこれを商業経営にも適用して次の如く述べている。

「日本の小売商人の大多数は、商品の質の善悪を論ずることなく、安価にして且つ自分の口銭の多きものを喜んでこれを客に勧むる傾向のあることで。仍って又悪弁なる工業家若しくは卸売商の中には、之を利用して実質不

良の品物を製し、他より口銭を多くして小売商の心を買収する者が沢山あるのです。此の奸商・奸工に対する制裁は、殆んど法律其他、人為では出来ぬものですから、彼等は何の畏る所もなく商工界に跋扈して居るのであります。然るに私は多年茲に思いを致し東京市をはじめ、幾多の都会に就きて、大凡三十年間に於ける小売商人の成績を調査しましたが、大凡小売商人の大部分は此三十年間に其町より其の姿を没してしまつたのであります。此中には家の事情若しくは稀には成功して他に移転せしものあれど、其大部分は事業上の失敗・窮乏若しくは肉体の滅亡等によるものであります。斯かる不徳義のものを不正手段にて籠絡する工業家、若しくは卸売商の末路も、未だ十分の調査は出来ぬ、其退化は疑ひなき所であります。たとひ富豪の事業にても斯かる不正を行わば天誅皆立ちどころに降っております。(中略)されば、識者若しくは財力のあるものにして自己の品性を完成せんとするものは、速かに最高道徳を体得し且つ実行し、進んで是等の一般人を開発し若しくは救済すべきであります。(中略)而して此宇宙に於ける自然に一致する善人のみが自ら此世界に於いて真に神の保護を受けて永久に存続するのであります(以下略)。」すなわち積善の家には必ず余慶あり、不善を積む家には必ず余殃あるゆえんを明らかにし、道徳と経済、道徳と経営が不離一体のものであり、道徳を含まざる行為、経営は持続することが出来ず、必ず衰亡するに至るものであり、経営の原点を道徳に求め、道徳を実践する者のみが、永久性・末弘性及び審美性を有して最後の幸福を生むに至ると、実に堂々たる道経一体論を展開して、幾百年、幾世紀にもわたって永続し、発展して来た多くの老舗経営の大黒柱となつた家訓の戒めと全く其の論理を同じくして、確固不動の信念を吐露してられるが、私もこれと全く同一の考えであり、ここに事業経営の基盤は最高道徳であると宣言する次第である。

創業以来 420 年(弘治元年川中島の戦)の歴史をもち、千余年の家系をもつ老舗の現当主である西村大治郎は「のれんの意識」について次のように述べている。

「世間から信用されるということは何によってあろうか。ただ創業年月が

長いからといったものではない。要するに善意を貫くということに帰するのではあるまいか。暖簾を英語でグッド・ウイル(善意)というのはまことにもっともというべきである。古来『積善の家に余慶あり』といわれると通り、善徳を積むことが世間に信用を得る絶対的条件である。老舗が世間から尊ばれるのはただ古いからだけではなく、善徳を積むことによって信望を得ているからである。いかに古くとも、こそくな手段を弄し、世間を欺き、他人を犠牲にするが如きことがあつては社会の信望は得がたく、やがて衰滅してしまふであらう。世間は公平であり、盲目ではない。その審判の座に耐えうるものでなければならぬ。」と。

この京都で最古といわれる西村大治郎氏(現千吉株式会社社長)の言葉たるや、約千軒に上る京都の老舗の経営哲学であり、幾多の家訓でも規定されており、私が例証した如く、共通した経営実践の姿である。

そして、これは偉大なる広池博士の創始提唱された「モラロジー経済学の原理」と全く合致するものであり、道経一体論の実践的意義を明らかに事業経営の基盤は最高道徳であることを実証するものである。

おわりに

以上私は京都における百年以上一つの家業を守って永続した老舗の経営を支え、その血となり、肉となって一つの特徴ある京都型経営、京都型商法、京都型の暮らし方も称せらるべきものを創出した、老舗の家訓と店則に家業の永続と発展の原点を発見し、これを偉大なる広池博士不滅の遺産である「モラロジー経済学の原理」の中の極めて限られた小分野に対比し、事業経営の基盤は最高道徳であることについて、私の一管見を論述し、実証して来たつもりであるが、最終的に到着した結論なるものは、人間として守るべき生涯の原点も、事業経営で実践すべき原点も、「モラロジー経済学の原理」に基づきべきであり、これに依拠することによってのみ、人心の開発と救済が行われ、人類の永遠なる平安と幸福が得られるものと断言してはばからないのである。

京都における多くの老舗の家訓や店則に説くところのものは、全く博士の説く「モラロジー経済学原理」を歴史的・資料的に裏付けるものであり、永続し、発展している老舗の現実の経営は、その実践的事実の証明になっているとあってよい。

私の考えている家業永続の秘訣は、家訓にあり、その家訓を現代に順応せしめた実践にある。家訓はその意味において今になお生きつづけていると堅く信じているが、「モラロジー経済学」は更に広大かつ深淵に、企業永続の秘訣を論理的、科学的に把握しているものであるといえる。

かかる観点に立って、私は本論文の読者諸賢が広池博士の偉大なる遺産である「モラロジー経済学」の「もとの第一は慈悲、至誠、人心救済、もとの第二はモラロジー経済学の原理による」べきであるとされているところの「道経一体論」を体得され実践され、「事業経営の基盤は最高道徳である」という不動の信念と、「八風吹クトモ動ぜズ」の決意で事業経営に精励され、博士の説くところの事業の永久性と末弘性の実現を図られるよう心より祈念して擱筆する次第である。